

若手アーティストが育つ魅力ある大阪に

大阪中之島美術館×関西・大阪21世紀協会 共同企画

Osaka Directory

Supported by RICHARD MILLE

おおさかディレクトリ

関西・大阪21世紀協会は、大阪中之島美術館と協力し、関西ゆかりの新進アーティストの作品を個展形式で紹介する「Osaka Directory Supported by RICHARD MILLE」を開催しています。3年目となる2024年度(第7～9期)は、国内外で幅広く活躍するアーティストが出展し、多くの来場者が、現代を象徴する独自の表現を楽しみました。

当協会はこの取り組みを通して、若いアーティストの活動を支援するとともに、大阪が国内外から「アーティストが育つ、活気と魅力のある都市」として認知され、さらなる賑わい創出に貢献することを目指しています。

谷中 佑輔 展

第8期 2024年12月21日～2025年1月19日

谷中佑輔／1988年大阪府生まれ。2014年京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。同年「アートアワードトーキョー丸の内2014」グランプリ受賞。2016年京都市芸術文化特別奨励者認定。同年度ポーラ美術振興財団在外研修員としてドイツ・ベルリンに滞在、以降ベルリンを拠点に活動。

再生医療の知見をアートに昇華



2020年に弟が運動中の事故で身体に障がいを負ったことをきっかけに、病気やケガ、障がいに対する身体の脆弱性や、進化する医療技術への思いを彫刻やダンスパフォーマンスで表現している谷中佑輔さん。本展覧会では、そうした中で関心を持った再生医療^{※1}をコンセプトとする作品が出展されました。

「人体の形成を受精卵に遡って考える発生学やiPS細胞のアプローチに則って人体彫刻を作ると、どんなアートになるか興味が湧いた」

谷中さんは、受精卵が三層の胚葉（外胚葉、中胚葉、内胚葉）に分化して、それぞれが皮膚や筋肉、骨格、内臓などに育っていくことに着目。ブロンズを外胚葉（皮膚）、ステンレスを中胚葉（骨格）、ガラスを内胚葉（内臓）に見立てた作品群は、細胞が分化して組織や器官を形成していく発生学の視点や、美術館に隣接するNakanoshima Cross（中之島クロス）^{※2}などでのリサーチから着想したものです。また、それらを包み込むようなキイチゴ染めの“カーテン”は、胚葉を守る“粘膜”に見立てた作品で、パートナーのレア・

d.アレクサンドさんとの共作です。細胞の培養をイメージさせるとともに、医療機器を思わせるフレームと相まって、会場全体に医療現場の緊張感を漂わせました。

展覧会初日のアーティストトークは、主なりサーチ先の一つ、公益財団法人京都大学iPS細胞研究財団 研究開発センター・センター長の塚原正義氏を招いて行われました。自身もアートファンという同氏は、「人間にとって、知的好奇心を原動力とするサイエンスと感性が揺さぶられるアートの世界観はどちらも重要。生命の発生を模した谷中さんの作品の面白さや不思議さに触れて、再生医療やiPS細胞の実用化に関心を向けるきっかけになればうれしい」とコメント。谷中さんは、「美術館の協力を得て実際にリサーチできたことは非常にありがたかった」と振り返り、再生医療への理解を深めたことで、引き続き身体の弱さや再生の可能性を作品制作を通して追求・表現していきたいと語りました。

※1) 再生医療…病気やケガなどで失われた身体の組織を、体細胞やiPS細胞などを移植することで、人間が持つ組織の再生力を助けにすることで復元させる医療。

※2) Nakanoshima Cross（大阪市北区中之島）…医療機関や企業、支援機関などが集積する最先端の「未来医療技術」の産業化拠点。2024年6月オープン。



谷中佑輔《CRISPR-PP3》2024年
ブロンズ・ガラス・ステンレス・アルミ合金・ワイヤー・キャスター、43×120×250cm



展覧会場全景

KOURYOU 展

第9期 2025年1月25日～2月24日

KOURYOU / 1983年福岡県生まれ。2008年東京藝術大学大学院美術研究科修了。ウェブ制作会社に勤める一方、サイトゲームの開設やその設計図のような絵画、模型作品を発表。2019年「瀬戸内国際芸術祭2019」女木島（香川県）での展示を契機にアートプロジェクト「EBUNE」を主宰。2022年より東京と大阪を拠点に活動。

「EBUNE」を率いて各地に漂着



かつて瀬戸内海には、家船と呼ばれる木造船に家族で住み、漁業を営みながら移動生活を行う人たちがいたといわれています。KOURYOUさんは、瀬戸内国際芸術祭2019※1への参加をきっかけにその存在を知り、漂海民の文化やそれが及ぼす影響をリサーチ。以後、家船よろしくアーティストが乗組員となって集団で各地に“漂着”し、作品を制作・発表するアートプロジェクト「EBUNE」を主宰しています。

「小説家やミュージシャンなど、さまざまなアーティストと共同でウェブサイトゲームを制作してきた手法を、実際のアート制作でもやってみようと思った」とKOURYOUさん。コンセプトは、家船にまつわる伝承や行く先々の地域に伝わる歴史や民話などを基に虚実混交のアイデアを作品として可視化し、その全てをもって「EBUNE」という1つのアートを作り上げること。さらにウェブサイト (<https://ebune.net>) を開設し、その“航海”の物語を発信しています。

2019年4月、EBUNEは瀬戸内国際芸術祭の会場である女木島（香川県）を“出航”し、以後、福岡・箱崎（2020年8月）、佐賀・有田（2021年5月）、兵庫・淡路島（同年10月）を経て2022年8月に大阪・西成に“漂着”しました。



KOURYOU《大阪港ヤソシマ地図》2025年（撮影：KOURYOU）



KOURYOU《大阪港ヤソシマ会議》2025年

本展覧会では、それらの活動がアーカイブ形式で紹介され、平面、立体、映像作品など、自身を含む大勢のアーティストによる多種多彩な作品が展示されました。その中で最も大きな作品が、今回の展示のために制作された《大阪港ヤソシマ会議》。映画『帝都物語』※2での巨大な東京のジオラマを前にした対策会議シーンを、大阪を舞台にして再現したインスタレーション作品です。この映画にも登場する東洋初のロボットと呼ばれる「學天則」が議長を務め、大阪の風景のジオラマを囲み、大阪の文化や歴史を議論する様子が展示されました。また最終日には、独自の視点で大阪の今と昔を物語る絵画《大阪港ヤソシマ地図》が発表されました。

「大阪では歴史や伝説が息づき、今まさに動いている感じがする。だから、そこで活動する人たちの思いを作品に込めようと思った」そう話すKOURYOUさんにとって、本展覧会は制作活動のゴールではなく通過点。EBUNEは、これからも新たな漂着地で独自の物語を紡いでいくことでしょう。

※1) 瀬戸内国際芸術祭…3年に1度、瀬戸内海の島々や港周辺で開催される現代アートの祭典。2019年は4月～11月に107日間開催され、約118万人が訪れた。

※2) 『帝都物語』（監督：実相寺昭雄）…荒俣宏のSF小説を基に1988年に映画化。平将門の怨霊により帝都（東京）破壊を目論む魔神とそれを阻止すべく立ち向かう人々との攻防を描く。

2025年度開催予定

Osaka Directory Supported by RICHARD MILLE

“今”という時代を読み解くアート体験

- | | | |
|------|--------|-------------------------------|
| 第10期 | 金 光男 | ／2025年11月15日（土）～12月14日（日） |
| 第11期 | 天牛 美矢子 | ／2025年12月20日（土）～2026年1月18日（日） |
| 第12期 | 和田 真由子 | ／2026年1月24日（土）～2月23日（月・祝） |

【会場】大阪中之島美術館 2階 多目的スペース（入場無料） 【主催】大阪中之島美術館、関西・大阪21世紀協会

【supported by】RICHARD MILLE

写真提供：大阪中之島美術館